

構造家・長谷川一美

前橋工科大学の「ものづくり」

朝倉幸子◎TH-1
illustration:Taco



■縁「斎藤公男」

大きなメガネと白髪と顎の下の髭が似合っている。雰囲気ある立ち姿と元気を誘う声。長谷川一美さんの教授生活は5年目となりました。旧前橋市立工業短期大学から平成25年に前橋工科大学に移行した前橋工科大学は、工学部をもつ公立大学。この大学で総合デザイン工学科構造計画・構造設計の研究室を構える長谷川さんは、SDGで修行し活躍後、構造設計の事務所（構造空間設計室<KKS>）を営んでいる構造家です。教授への推薦人が構造家・斎藤公男先生（本コラム61回目に登場）という最強のバックボーンをおもちだ。斎藤先生に会う機会があり、そのお話をすると微笑が返ってきた。池原義郎・建築設計事務所が設計の下関市地方卸売唐戸市場（本誌2009年3月号掲載）など太いパイプでの協働がある。

■師「渡辺邦夫」

東京理科大学工学部建築学科を卒業したときは就職氷河期だった。実は建設企業および役人への道に乗りきれなでいるときに、学校の掲示板で渡辺邦夫さん率いるSDGの募集を見つけたそうだ。一般的な初任給が10万円なのに対して、SDGは3万円。そこに面白さを感じて入社試験に行ったというから、

相当な変わり者の長谷川さんだった。ところが、まさかの不採用。まったく納得できないので説明を求めて電話した。再接触に来るようといわれて訪問したら、コーヒーまで出て歓迎ムード。驚きながらもそのまま採用される。実は、渡辺邦夫所長は受験者20名を全員に不採用通知を出していた。文句をいつてきた人だけ採用すると決めてのことでした。技術も人間性もすっかり偉大な構造家の渡辺邦夫師匠の虜になって平成3年3月まで在籍。後にも先にもこのスタイルで入所した人は他にいなかったそうです。渡辺邦夫さんはスタッフに対して大変厳しく、打合せの際には、必ず三つの案を提出させた。それも全部違う構法を提案しなければならない。できない者のデスクは翌日なくなっていたという。デスクを守りきり今も尊敬する師匠を得た長谷川さんです。東京フォーラムで、ガラスのキャノピーで力を発揮した藤川由美さんや徐光さん（本コラム57回目に登場）などが同僚だった。藤川さんは構造家の名和研二さん（本コラム25回目に登場）の奥さん。覇志堂とは「僕が日本語を教えた」と自慢する中国でトップ技術者だった徐進さんや、FM・PM・CM力が抜きん出ている弟の構造家・徐光さんの話で盛り上がる。1994年から在籍した腰原幹雄東京大学教授（本コラム49回目に登場）の入所当時も知っていて、現在活躍する構造家仲間と絆も深い。SDGの生き字引のような長谷川さんである。

■全力「教授」

「プレストレストの本来の有効性を発揮した新しい応用を検証して、その有効性を実証したい」と熱心に語る長谷川さん。学生とPC構造の仕口部の挙動がもたらす優位性を確立すべき研究に取り組んでいるそうだ。試行錯誤しながらやっと自分の目指す研究ができるまでに成長した研究室である。「ものづくり」をキーワードに学生に構造の楽しさを教えていきたいという。インタビューの途中で入室した学生との会話を聞くと、「兄貴分な」教授の姿がそこにあった。

1984年に発表された建築家・内藤廣さんが初めて設計した美術館、「ギャラリー TOM」は長谷川さんが構造を担当した建物。教授に生きている建築作品が沢山あることは、学生さんたちには嬉しい実践教材だ。構造の楽しさ、建築の魅力を前橋から長谷川一美さんが力のかぎり発信する。